サポートブックグループ

研究協力者　平成17～18年度　得能　栄子　（希望が丘ディサービスセンターkakko）
平成17～18年度　永井　淑子　（希望が丘ディサービスセンターkakko）
平成17～18年度　大野　鮎子　（ワークショップひなげし生活支援センターほっとらいん）
平成15～19年度　九良賀野佳代子（サポートブック教室　本校保護者）
平成15～19年度　吉野　祐子　（サポートブック教室　本校保護者）

1．グループの概要

サポートブックとは、「第三者（支援者）が障害のある子どもとかかわるときに知っておくとよい情報をまとめたもの」である。本人や本人の行動を理解するだけのものではなく、本人のニーズに基づいて作成するという意識で取り組みたいと考えている。

本校におけるサポートブックの形態は、はがき大のファイルを使用し、1ページにつき1項目ずつ本人に関する情報を記載したものとなっている。20程度の項目があり、個々に応じたり支援場面に応じたりして、必要な項目を選択して記入しファイルに入れている。

サポートブックを広義に捉えたときに、障害をもつ人自らが使う「コミュニケーションブック」などもこれに入れる場合があるが、本校ではサポートブックを「支援者が使うもの」に限定し、ここでは別のものとして捉えている。

本校では、平成15年度に小学部と中学部の保護者が「サポートブック作成教室」を立ち上げてその活動を始めたが、高等部の保護者の参加はなかった。そこで教師の方で作成しようと研究がスタートした。発足当時から研究グループのメンバーが高等部の教師だったので、サポートブックの主な利用場面を「支援費制度による各種サービスの利用」の他に、「産業現場等における実習（以下　現場実習と記す）」と位置づけ、その有効な活用と汎化を目指して研究を進めてきた。

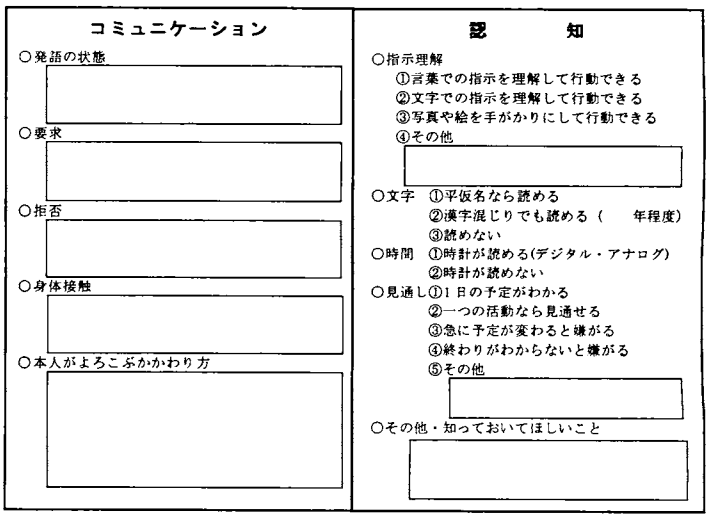
2．これまでの研究について

（1）平成15年度（1年目）の研究

はじめに、支援者に伝えたい情報の項目を教師が考え、それに沿って保護者が記入していくという「埋め込み式」の形でサポートブックを作成した（**資料1**）。完成したサポートブックは、現場実習先で活用してもらったり教育実習生に生徒理解の一環として読んでもらったりして、その後アンケートによる評価を行った。さらに作成者（保護者）にもアンケートを行い、その結果を「サポートブック作成教室」のものと比較した。

このように初年度から本校では、小・中学部の保護者が作った「記述式サポートブック」と、「埋め込み式サポートブック」の2種類が存在していた。しかし、アンケートの結果では、サポートブックを使用する側の支援者の評価に大きな差は認められなかった。一方、作成した保護者

資料1　埋め込み式サポートブック



コミュニケーション

○発語の状態

○要求

○拒否

○身体接触

○本人がよろこぶかかわり方

認　知

○指示理解
①言葉での指示を理解して行動できる
②文字での指示を理解して行動できる
③写真や絵を手がかりにして行動できる
④その他

○文字　①平仮名なら読める
②漢字混じりでも読める（　年程度）
③読めない

○時間　①時計が読める(デジタル・アナログ)
②時計が読めない

○見通し①1日の予定がわかる
②一つの活動なら見通せる
③急に予定が変わると嫌がる
④終わりがわからないと嫌がる
⑤その他

○その他・知っておいてほしいこと

からの評価は「埋め込み式」のほうが低く、高等部の保護者がサポートブックに満足していないことや、そのために積極的に使おうとは思っていないことが明らかになった。

（２）平成 16 年度（２年目）の研究

前年度の課題をふまえ、高等部でもサポートブックの形式を「埋め込み式」から、**資料２**のとおり「記述式」に変えて作成した。また、教師が作成して保護者に加筆や訂正をしてもらうようにした。そして現場実習先に持参して活用してもらい、前年度と同様にアンケートを行った。

資料２　記述式サポートブック

コミュニケーション１	余暇利用
理解面	学校での好きな活動
表出面	家での好きな活動
<要求の仕方>	特　技
<拒否の仕方>	休日の過ごし方

支援者や保護者からの評価は前年度より上回った。その要因としては、記述式にすることで、一人一人の支援上配慮することまで細かく記入できたことや、障害をもつ子どもに対して「できない子」ではなく「支援があれば可能性をもつ子」という視点を支援者に提示できたことなどが考えられた。また、サポートブックの作成を通して家庭と学校での様子の情報交換をすることにより、相互理解が深まったというメリットもあった。さらに、保護者の同意を得て、卒業生の就労先に移行支援の一環として提出することができた。

（３）平成 17 年度（３年目）の研究

それまでの研究により、アンケートでは「あれば便利である」という評価を受けていたが、サポートブックが具体的にどのように活用され評価されているか、また問題点は何かを明確に捉えたいと考え、福祉施設の協力を得て聞き取り調査を行った。

研究協力施設への依頼にあたっては、卒業生が就労したり在校生が現場実習を行ったりしている実績があり、高等部の生徒が比較的多く支援費制度への登録をしている金沢市内の福祉施設２カ所にお願いした。アンケートの結果からは、作成者（学校）が伝えたいと思っていることと支援者（施設）が必要とする情報との差や、情報の共有と同時に生じてくる個人情報の保護の問題点を明確にすることができた。また、施設では学校が考えている以上に「本人の好きなことや興味関心」についての情報を必要としていることも分かった。

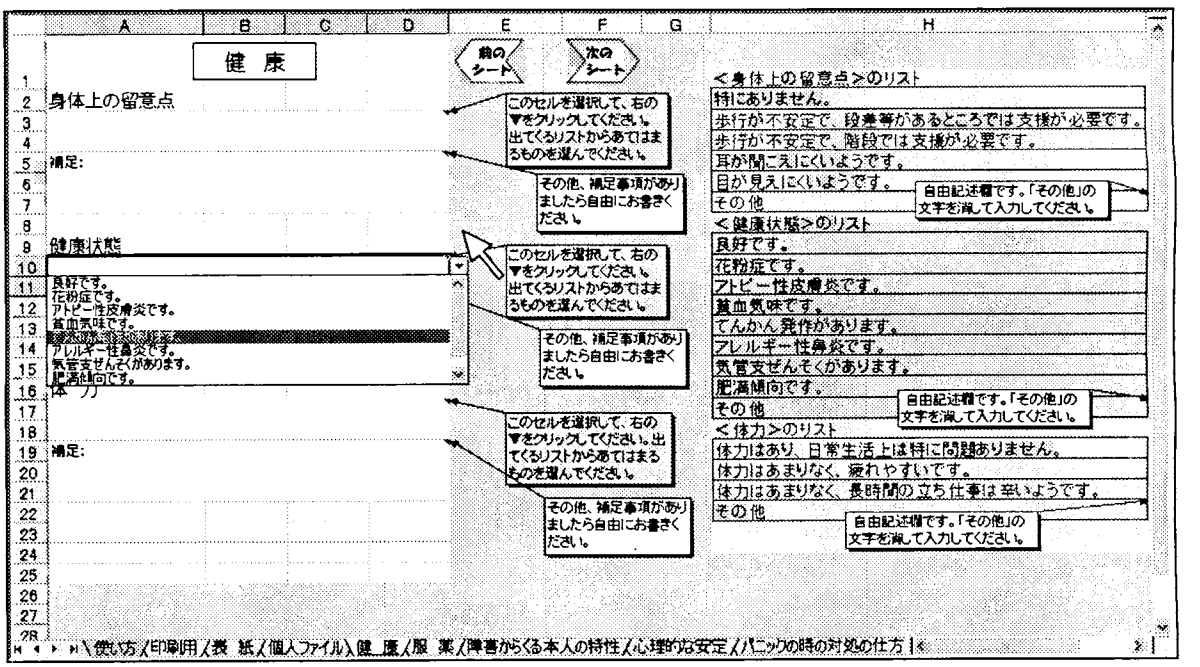
さらに、この年初めて保護者からサポートブックのデータが欲しいと依頼があった。各家庭でガイドヘルパーや日中一時支援のサービスを受ける際に活用したようである。協力施設からの意見を参考にして新たに加えた「入浴」や「宿泊」の項目が役に立った。

（４）平成 18 年度（４年目）の研究

４年目の研究は、サポートブックを多くの人により簡単に作成してもらいたいと考え、エクセルでドロップダウンリストを利用したフォーム作りに取り組んだ。フォームでは項目ごとに選択肢を設けて、子どもの実態に応じて選ぶことによって効率化をはかった（**資料３**参照）。そして本校教諭を対象にサポートブック作成の校内ワークショップを開催し、アンケートによる評価を行った。加えて「サポートブック作成教室」の主催者に読んでもらったり、一般企業で現場実習を行う生徒のサポートブックをその保護者と作成したりする中で改良を加えた。

校内ワークショップのアンケートからは、フォームがあれば便利であるという結果が得られたが、同時にエクセルの操作自体が難しいという声も聞かれた。また、リストから選択して入力した文章を簡単に直せない点で改良の必要性が残された。それでもこの年の成果は「情報研究グループ」の協力の下、本校のホームページ上に記述式とフォームの２種類の形式を載せることができたことである。これにより、誰でもサポートブックの形式を簡単にダウンロードできるようになり、汎化が一歩進んだといえるであろう。

資料３　ドロップダウンリストによるサポートブック



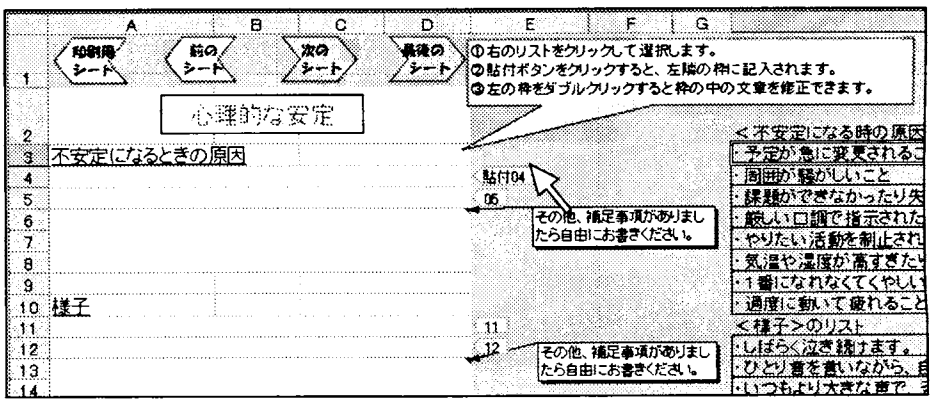
（５）平成１９年度（５年目）の研究

前年度のフォームではリストの項目を手元で修正できなかったので、作成者にとってより自由度が高いフォーム作りに取り組んだ。本校主催の「特別支援教育研修講座」でワークショップを行い、県内の特別支援学校や特別支援学級の教員にこのフォームを利用してサポートブックを作ってもらい、アンケートによる評価を行った。さらに、10 月から始まる高等部１年生の現場実習用のサポートブックを作成して、実習先で活用してもらいアンケートによる評価を行った。

見直しを重ねて完成したフォームは資料４の通りで、前年度のドロップダウンリスト方式から、VBA によるボタン方式へと改良したものである。

また、これまでの弱点であった校内における汎化へ

資料４　ボタン方式によるサポートブック



の足がかりとして、サポートブックと本校の高等部で現場実習の際に使用している「現場実習生について」という生徒の実態表をリンクさせた。その結果、別々に作成しなければならないためにサポートブックの研究グループの教員のみが作っていたサポートブックであったが、来年度からは高等部においての汎化もすすむのではないかと期待している。

３．研究の成果

この５年間は、サポートブックの形式を作成し、現場実習や支援費制度を利用したサービスの場で活用し、アンケートによる評価を行い、また形式を改良することを繰り返してきた。その中で本人とその保護者、支援者及び作成者の三者の連携の必要性を実感できた。また、サポートブックの意義や作成する際に大切にしたいことも少しずつ明らかになってきた。サポートブックは万能のツールではないが、特に初めての活動の場面において、本人も支援者も楽になるツールである。初めてのガイドヘルパーさんと外出する時、障害のある人が今まであまり就労していない一般企業に実習に行く時、急に施設で宿泊しなければならない時などに、本人を楽にして保護者の気持ちを後押しし、支援者に安心感をもってもらえるものであると考えている。

研究を始めた当時、サポートブックはまだ耳新しい言葉であり、おそらく学校としてサポートブックの研究に取り組んだのは本校が初めてではないかと思われる。研究を進める一方で、本校の「特別支援教育講座」や「研究協議会」でサポートブック作成のワークショップを開催したり、石川県教育センターの研修講座で話をさせていただいたりして、地域に発信できたのではないかと自負している。現在、サポートブックの概念は広く知られるようになってきているが、少しでもそれに貢献できているとすれば嬉しい限りである。

また、昨年からは本校のホームページ上にサポートブックのフォームを載せて誰にでもダウンロードができるようにした。公的な書類ではないサポートブックを作ることは、実際には時間がかかって容易ではないと思われる。より多くの人に私たちの作成したフォームを利用して、担当する子どもについてサポートブックを作って頂ければ、それが私たちの研究の一番の成果であると考える。